

南九州の古道について3

—令和2年度企画特別展「鹿児島城館」補足—

上村俊洋

はじめに

黎明館が立地する地域に所在した近世鹿児島城跡の建築物等は、西南戦争等で失われた。国指定史跡「城山」を本来の本丸・二之丸とした鹿児島城跡は、その山麓の藩主居館部を明治以降「本丸」と呼称し、南西に隣接する区画を同様に「二之丸」と呼称した。「本丸」部分は、明治以降、陸軍熊本鎮台分営、鹿児島中学造士館、第七高等学校、鹿児島大学と変遷の後、昭和58(1983)年鹿児島県歴史資料センター黎明館(令和2年度、歴史・美術センター黎明館に改称)として利用され、敷地を圍繞する石垣・濠・御楼門橋等が鹿児島県史跡「鶴丸城跡」に指定されている。

令和2年春、近世鹿児島城の建築を想起させる鹿児島城御楼門が完成した機会に、黎明館では同2年度企画特別展として「鹿児島城館」を開催した。同展では、

ア 天守を持たない鹿児島城に至る前段階、中世以前の城館の立地(展示の第1・2章)

イ 御楼門を初めとする鹿児島城の近世から現代に至る姿(展示の第3・4章)

を展示の柱とし、アでは、

ウ 中世城館は、政治・経済の中心地を掌握する交通の要衝に立地する平地居館が本来の姿

エ 抗争が常態化するなかで、詰め城を城塞化して居館を移す

ことを焦点に置いた。

南九州の中世城館は山城として広く認知され、その麓に近世外城の地頭仮屋・麓が形成され、地頭仮屋跡地が近代以降の役場・学校施設として活用された。この中世山城と隣接する麓の役場・学校の景観は、南九州に暮らす我々にとって馴染み深いものである分、中世城館＝山城の印象が強くなる。

企画特別展「鹿児島城館」では、他地域の守護所・守護館、中世領主の居館・詰め城の立地関係を参考に、上記のウ・エを紹介⁽¹⁾したが、中世城郭の専門外の立場から遠慮気味に構成した展示内容では言葉足らずの面もあり、若干の補足⁽²⁾を行いたい。

1 居館と詰め城の立地

(1) 守護所・領主館の立地

鎌倉時代の守護は「遷替の職」と呼ばれ、交替が多く、守護家ごとに守護所の場所も異なると考えられ、不明な点が多い。しかし、任国地に古くからの基盤を持たない東国御家人が守護となると、任国統治の円滑化を目指して国衙機構と結びつくために、後述の大宰府近隣に宰府守護所を設けた少弐氏の様に、国府近郊に守護所を設けたと考えられる。また、国府は都と各国を結ぶ古代官道が通過する地であり、地域の交通・情報網の結節点である。非守護格の領主層も、後述の益田氏居館や阿波国(徳島県)城館の様に古代官道・中世交通路や河川交通の要地に平地居館を設ける傾向がある。詳述しないが、室町・戦国期の淡路島守護所や長門・土佐国守護代所も古代官道想定経路近隣にある。

室町期の守護所・領主館は、足利將軍邸である室町殿(京都市)を規範とする方形平地居館が主流となるが、その立地は、やはり地域の政治・経済の中心地である国府を継承する地域や、主要交通路の結節地が選ばれる。

(2) 方形平地居館

南北朝・室町時代を通じて細川氏が守護職を帯し、抗争の少なかった阿波国では、全土の一割程の面積の吉野川流域平野部に中世城館の大半が集中しており、河川を含んだ交通要地を押さえることが居館立地の主要因であることがうかがえる。吉野川下流域の阿波国府から讃岐国府を結ぶ古代南海道近隣に方形平地居館群として存在した勝瑞館⁽³⁾(徳島県藍住町)は守護細川氏及びその家臣から戦国大名化した三好氏の本拠地であるが、戦国期の長宗我部氏の侵入に際し隣接して構築した勝瑞城は、方形平地区画に濠を廻らした応急的なものである。

(3) 方形平地居館と山城

石見国益田荘(島根県益田市)の荘園経営拠点は、南北朝期には中世領主益田氏の三宅御土居として居

表：守護等領主居館と詰め城の立地

所在国	守護・領主等	居館			詰め城	
		平地居館			山城	
越前国	朝倉氏	朝倉氏館	←隣接→		一乗谷城	
石見国	益田氏	三宅御土居	←益田川を挟み約0.7km→			七尾城
周防国	大内氏	大内氏館	←約1.5km→			高嶺城
阿波国	細川・三好氏	勝瑞館	←隣接→		勝瑞城	—
豊後国	大友氏	大友氏館	←約0.7km→	上原館	←約8.5km→	高崎山城
筑前国	少弐氏	宰府守護所	←約1km→	浦ノ城	←約2km→	有智山城

館化する。この地は、益田川右岸にあって、古代山陰道・中世石州街道が通過する水陸交通の要地で、益田川河口部では益田氏の交易拠点が発掘されている。南北朝の抗争期には、方形平地居館である三宅御土居から益田川を挟んで約0.7km離れた丘陵の尾根を砦としたが、抗争が終わると再び三宅御土居に移る。戦国期、益田氏が従属する大内氏・陶氏が毛利氏と対立・抗争化すると、先の丘陵上を大規模に造成・城塞化した七尾城に居館を移すが、毛利氏に臣従後は、三度三宅御土居に移る⁽⁴⁾。

周防国在庁官人から周防・長門両国（ともに山口県）を基盤とする守護大名に成長した大内氏は、山陽道沿線の防府付近から石州街道が通じる山口盆地（山口市）に本拠地を移し、一辺約150m四方の方形平地居館である大内氏館を本拠とした。戦国後期の毛利氏との抗争期には、館西方約1.5kmの高嶺城を構築した⁽⁵⁾。

鎌倉時代以来の筑前国（福岡県）守護少弐氏は、大宰府政庁跡（太宰府市）東隣の宰府守護所を治所とし、その北東約1kmの段丘上の浦ノ城を居館としたが、南北朝期の抗争に際し、浦ノ城の北東約2kmの宝満山系山岳寺院を城塞化した有智山城を詰め城とした⁽⁶⁾。

豊後国（大分県）守護大友氏は、鎌倉時代末までには豊後国内に拠点を設け、大宰府・豊前国府・肥後国府・日向国府を結ぶ古代官道が結節する大分平野（大分市）において、最盛期には一辺約200m四方の方形平地居館に拡大する大友氏館を本拠とした。その南方約0.7km、豊後国府に北接する台地上には一辺110m前後を測る土塁を外周に廻らす方形居館の上原館を持った。南北朝期や戦国末期に島津氏と対立した際は、大友氏館・上原館から直線距離で約8.5km、上原館から尾根伝いに北西約10km離れた高崎山城を詰め城とした⁽⁷⁾。

このように、鎌倉期の守護、室町・戦国期の守護大名・戦国大名や中世国人領主等は、古代官道等の水陸交通の要所を押さえる方形平地居館を拠点とし

たが、その周囲は区画溝と築地等で仕切られる程度のもので、足利將軍家の室町殿を規範としたとされる⁽⁸⁾。近隣に要害となり得る高地を得ない勝瑞館では隣接地に簡易な平城の勝瑞城を設けているが、抗争時に必要な詰め城は、益田氏の約0.7kmから大友氏の約10kmまで、平時の居館から遠く離れた山上に築かれており、抗争が常態的なものとは思えない立地である。益田氏が平時と抗争期に方形平地居館と山城を使い分けたことが象徴的である。

「表：守護等領主館と詰め城の立地」は、以上の概要をまとめたものである。居館と詰め城の立地について、西日本の一部のものを取り上げたに過ぎないが、これに対して南九州の近世地頭仮屋の設置の背景となる中世山城との立地関係は、山城の麓に居館を設ける印象が強く、下記の朝倉氏のものに類似する。また、他地域の居館・詰め城の関係からすると、山城と麓居館部が近接する南九州の城館は、抗争の常態化を前提としたものに思える。

一方、鹿児島市教育委員会が北麓遺跡を発掘調査した際に検出した、近世谷山麓に先立つ中世方形区画（東西×南北140m以上）⁽⁹⁾について、益田氏城館のように、西方約1.2km離れる谷山城に対する平時の居館と捉えることができれば、他地域の居館・詰め城の立地関係に近く見える。

（4）近世鹿児島城の姿

他方、応仁の乱を契機に下剋上でのし上がり抗争期に成長した越前国（福井県）朝倉氏は、山城の一乗谷城（福井市）山麓に三方に土塁・濠を廻らした一辺約100m四方の方形平地居館の朝倉氏館を設けた⁽¹⁰⁾。その姿は、城山を背景に、かつては三方を濠・石垣で囲繞（近世鹿児島城を描く絵図類では、現黎明館敷地と現鹿児島県立図書館敷地間に濠が描かれ、発掘調査でも検出されている。）した一辺約150m四方の黎明館敷地（明治以降の呼称「鹿児島城本丸」区画）の姿に似る。両者の時代は異なるものの、大内氏館や大友氏館の例を見れば、越前一国を領する

朝倉氏の館と、薩摩・大隅両国及び日向国諸県郡を領した島津氏の鹿児島城の居館規模の差は、その分国数の差を反映しているように思える。

近世鹿児島城の立地は、他地域の中世守護所・守護館に多く見られる古代官道沿線ではない。しかし、南北朝期の東福寺城、室町期の清水城、戦国期の内城と、中世後期以降の島津氏が本拠（守護館、当主居城）を置いた鹿児島は、大隅国守護職の奥州島津家氏久以来、薩摩・大隅両国を統治する水陸交通の要地として重視されてきた地である。前代の島津家5代貞久の碓山城から、領国統治の拠点を鹿児島に移した様は、周防・長門両国守護職を帯して石見国へ通じる石州街道を押さえる領国の中心地山口に居を移した大内氏と類似する。城山を背後に控えて天守を持たない近世島津氏の鹿児島城は、周防・長門両国を基盤に拡大した中世大内氏の大内氏館と同規模の方形平地居館に、近世城郭的な石垣・濠を廻らした姿ととらえられる。天守を代表する近世城郭様式よりも、中世以来の守護職の伝統を重視した守護館様式が鹿児島城の姿であろう。

2 碓山城の立地

（1）南九州の中世城館の立地

中世城館は、古代官道経路やその後の中近世の主要交通路、水上交通路に沿って立地すると考える（添付「地図 古代官道想定経路及び前近代交通路と中世城館の立地」参照）。花岡木崎遺跡⁽¹⁾（熊本県芦北町）は、佐敷城跡南東の佐敷川左岸に立地し、古代官道佐職駅に比定される。この地は、古代西海道西路（大宰府―筑後国府―肥後国府―薩摩国府）及び肥後国・日向国連絡路（肥後国南部―大隅国北部―日向国諸県郡―日向国府）、中近世人吉街道を押さえる要地であり、古代以来の交通路上に中近世城館である山城が立地している。

企画特別展では、南九州の守護所・守護館の類例として、島津氏が拠点とした中世城館が古代官道や中近世の主要交通路に近接することを紹介した。総州島津家の木牟礼城・屋地（出水市）と碓山城（薩摩川内市）や川辺平山城（南九州市）、奥州島津家の東福寺城・清水城（鹿児島市）、伊作・相州島津家・近世島津家の田布施城（南さつま市）や伊作城・一宇治城（日置市）と内城・鹿児島城（鹿児島市）、島津義弘の飯野城・加久藤城（えびの市）と古麓城（八代市）や栗野松尾城（湧水町）及び帖佐館・加治木館（始良市）、島津義久の隼人富隈城・本御内

（国分舞鶴城）（霧島市）等である。多くは、港湾・河川も掌握する位置にある。これらのうち、枠囲みの城館は古代官道想定経路に近接している。

古代官道経路ごとに見ると、大宰府から薩摩国府へ至る西海道西路沿線には古麓城・木牟礼城・屋地、薩摩国府・大隅国府間には碓山城・帖佐館・加治木館・隼人富隈城・本御内、肥後国・日向国連絡路沿線には栗野松尾城・加久藤城・飯野城が立地する。

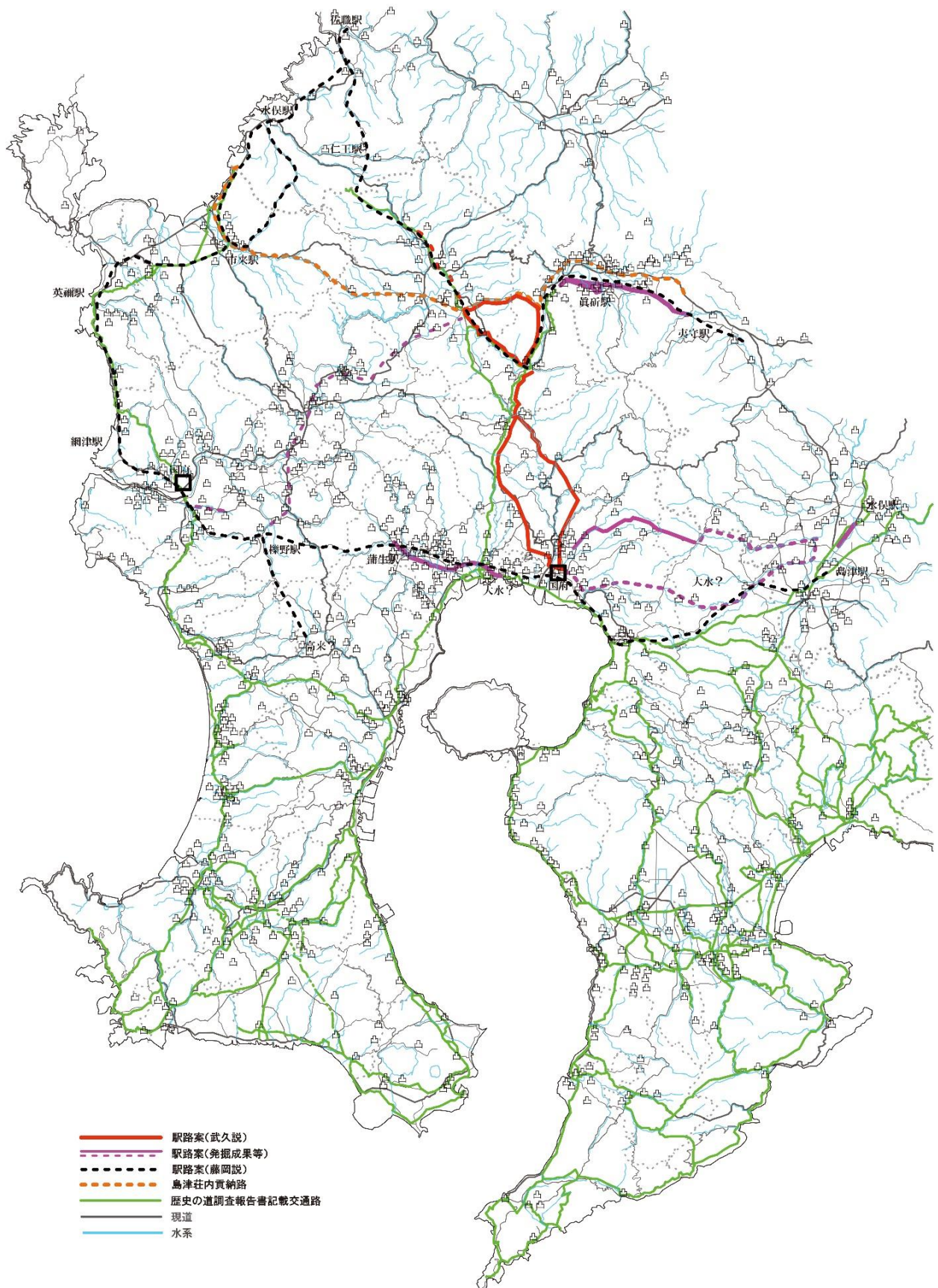
また、官道沿線でなくとも、薩摩半島部所在の上記城館の立地は、赤色土器や厨墨書土器の出土分布から想定される古代交通路⁽²⁾沿線上にある。古代以来の主要交通路は、その後も何らかの形で継承・利用されていたと思われる。

特に、島津領内外の往来を押さえる位置に置かれた島津義弘の拠点がいずれも古代官道想定経路に近接することは興味深い。白村江の敗戦以降の軍事的要請から建設・整備された古代官道網は、戦国期の城館の立地要件と共通するものがあるのだろう。また、屋地・清水城館・内城・鹿児島城・帖佐館・加治木館・富隈城・本御内は、他地域の守護館等と同様の方形平地居館の系統と思われる。

（2）中世前期島津氏の守護所

鎌倉時代の薩摩国守護島津氏の在国は、元寇に伴う東国御家人の西遷以降の碓山城在城期のことと考えられ、それ以前の確実な守護所は不明である。任国への当主の本格的な在国が元寇を機にする鎌倉時代後半以降に、当該国府近隣に拠点を設けるのは、豊後国守護大友氏の事例と似る。

島津氏の歴代本拠地の一つに数えられる木牟礼城は、島津氏家臣本田氏の鎌倉時代の活動が歴史史料から伝わり、守護の出先として本田氏が活動した可能性がある。企画特別展では、他地域の守護館と詰め城の立地関係から、屋地を本来的な館、木牟礼城を抗争時の詰め城と捉えた。木牟礼城・屋地の立地については、市来駅（出水市か）―英祢駅（阿久根市か）間の古代西海道西路想定経路の北側に位置する。木牟礼城北側には不知火海が広がり、黒瀬戸を挟んだ長島地方以北は中世以前には肥後国に属し、古代出水郡（出水市・阿久根市）地域も薩摩国「出水郡」⁽³⁾として成立する以前から肥後国の影響下にあったと考えられることから、北方からの海陸交通拠点としての立地が考えられる。また出水平野は平安時代には島津本庄（都城盆地）―眞幸院（加久藤盆地）―牛屎院（大口盆地）を経る島津荘貢納経路の出口「和泉郡」⁽⁴⁾であり、大隅国北部・日向国南



地図 古代官道想定経路及び前近代交通路と中世城館の立地

部に通じる要衝でもある。

屋地の中郡遺跡群では、平安時代末期に摂関家の荘園経営拠点等で出土する楠葉型瓦器や、中世でも

稀少な景德鎮産青白磁龍首水注等が出土⁽¹⁵⁾しており、古代・中世を通じて水陸交通を抑える経営拠点と思われる。先に見た石見国の益田氏城館と同様に、

中世城館の本来的な立地は、このような交通の要衝、地域経営の拠点が重視された。

他地域では、国府近郊に守護所・守護館が設けられる傾向がある。薩摩国府が所在する川内川右岸の高城郡（薩摩川内市）内には、島津氏が鎌倉時代に所領を持たなかったことから、島津氏の碓山城は川内川左岸の薩摩郡（薩摩川内市）に所在する⁽⁶⁾。南北朝期に島津氏5代貞久の拠点として見える碓山城は、遅くとも、元寇に伴う西遷以降、鎌倉時代末までに島津氏によって設置され、薩摩国守護職とともに総州家島津師久に引き継がれる。

碓山城と国府・古代官道との位置関係については、高城郡薩摩国府－薩摩郡田後駅－薩摩郡櫛野駅（いずれも薩摩川内市か）を通る古代官道想定経路（薩摩国府－大隅国府間）が、碓山城南方の平佐城（薩摩川内市）南側を通ると考えられる⁽⁷⁾。

企画特別展段階では、想定経路から碓山城が離れていることに若干の違和感を持っていた。最近、碓山城について下鶴弘氏は、川内川を挟んで、薩摩国府・国衙域に匹敵する規模の島津氏守護所として、平佐城東側までを含む南北1.7km×東西1.4kmの広域的な碓山城域を仮定された⁽⁸⁾。この場合、守護所碓山城域の南側は、古代官道想定経路を継承する薩摩街道に近接する。現在知られる碓山城跡は、守護所域の北端に位置する。現在知られる碓山城跡だけでは古代官道との関わりが見えにくい、下鶴説に拠れば、薩摩国守護所域も他地域同様、古代官道と結びつくことが捉えやすくなる。

おわりに

中世城館は、生産力があり地域経営に利便性のある水陸交通の要衝（特に、守護所は、国府または古代官道以来の重要経路に沿うことが多い）に立地する方形平地居館の形態をとる傾向がある。この立地を優先するからこそ、抗争時に必要な詰め城を隣接して設けることができず、益田氏の平地居館と詰め城は川を挟んで約0.7km、大友氏の平地居館と詰め城は約10kmを隔てることになる。本来の中世城館は、交通・経済を掌握する平地居館であり、山城優先の立地ではない。詰め城の山城は必要に迫られた後付けのものだろう。

近現代に採石により姿を変えた碓山城の往時の様子は窺いがたいが、下鶴説の守護所碓山城域内の詰め城として機能したものだろうか。

南九州でも最初期の城郭は、建武2(1335)年12月

の荘園経営拠点である穆佐院政所の軍事利用⁽⁹⁾である。郡元西原遺跡（宮崎県都城市）では、島津荘拡大期の11世紀後半から12世紀代に埋没したと考えられる大溝（幅約3.3～4.4m、深さ約1.4～1.5m、底面幅約1.5～2mの区画溝で、一辺約50m、他辺は検出範囲で30m）に囲繞された荘園経営拠点と考えられる方形平地区画遺構が検出されている⁽¹⁰⁾。恐らくは荘園経営に便利な平地居館の区画溝等の軍事利用から南九州の城館も発展したと考える。その後の南北朝期の動乱や室町期の国人領主間の抗争の恒常化を経て、現在の南九州の人々に印象深い、地域拠点の背後にそびえる山城が中心的な城館になったのではないだろうか。

荘園経営拠点を方形平地居館として軍事利用する経過は、石見国益田氏の三宅御土居跡に通じる。益田氏は益田川の対岸の丘陵を城塞化して抗争期の城館としたが、南九州では平地居館をさらに山城の山麓に移動させて一体化させた姿が、現在の南九州で見慣れた中世山城と近世麓の姿である。

本稿の論旨は、他地域の中世山城と平地居館の立地関係から窺える傾向が、南九州でも本来の姿だったのではないかという予察に過ぎず、南九州の個別の城館について、考古学手法及び文献史学手法による検証ができていないことを認識している。

ここまで見てきた方形平地居館の立地環境は、時代を超えて地域の政治・経済・交通の中心的位置にあり続け開発が絶えない。そのため、中世山城跡のように現地表面にその姿を留めることは難しく、類例の確認は、開発に先立つ発掘調査によって検出される可能性に期待せざるを得ない。荘園経営拠点と見られる郡元西原遺跡や、北麓遺跡に見られる近世谷山麓に先行する中世方形平地区画等の類例の増加と、その近隣山城との立地関係や交通網との接続関係等の情報についての事例の増加に期待する。

註

- (1) 鹿児島県歴史・美術センター黎明館2020『黎明館企画特別展 鹿児島の城館』展示図録, 上村俊洋2020「守護所・守護館からみる鹿児島城」（前掲展示図録掲載）
- (2) 上村2020「令和2年度黎明館企画特別展「鹿児島の城館」」（令和2年10月16日開催・鹿児島県総合教育センター短期研修講座資料, 同11月1日開催・黎明館学芸講座（企画特別展展示解説講座）資料）解説内容及び、その後の若干の知見

- を追加する。
- (3) 徳島県教育委員会編 2011『徳島県の中世城館』、藍住町教育委員会編 2000「勝瑞館跡 第3次発掘調査概要報告書」・同編 2020「史跡 勝瑞城館跡Ⅰー勝瑞館跡西半部の発掘調査ー」(『藍住町教育委員会発掘調査報告書』第1集)
- (4) 益田市教育委員会編『益田氏関連遺跡発掘調査報告書』(1993「益田氏関連遺跡群Ⅰー勝達寺跡・七尾城跡ー」, 1994「益田氏関連遺跡群Ⅱ」, 1993「益田氏関連遺跡群Ⅲー七尾城跡ー」, 1998「七尾城跡・三宅御土居跡」, 2002「三宅御土居跡」, 2018「三宅御土居跡Ⅲ」)
- (5) 山口市教育委員会編『大内氏館跡』(1982「大内氏館跡Ⅳ」, 2000「大内氏館跡Ⅹ(遺構編)」, 2010「大内氏館跡Ⅺ」, 2012「大内氏館跡13」, 2013「大内氏館跡14」, 2014「大内氏館跡15」), 同編 2003「史跡高嶺城跡周辺測量調査報告書」, 同編『大内氏築山館跡』(2014「大内氏築山館跡7」, 2016「大内氏築山館跡8」), 同編 2015『大内氏関連町並遺跡9』)
- (6) 太宰府市教育委員会編 1989「宝満山遺跡」(太宰府市の文化財12)・同編 2001「宝満山遺跡群Ⅲ」(同55), 太宰府市編 2004「鎌倉時代の太宰府」(『太宰府市史 通史編Ⅱ』), 福岡県教育委員会編 1970「浦城跡ー筑紫郡太宰府町所在中世城館跡の調査ー」(『福岡県文化財調査報告書』45)・同編「福岡県の中世城館跡」(2014「Ⅰー筑前地域編1ー」(同249), 2015「Ⅱー筑前地域編2ー」(同250))
- (7) 大分市教育委員会編大友氏関係発掘調査報告書(2000「上野大友館(上原館)跡」, 2002「上野大友館(上原館)跡」, 2015「大友氏館跡1」, 2017「大友氏館跡2」, 2019「大友氏館跡3」)
- (8) 同志社大学歴史資料館編 2005『学生会館・寒梅館地点発掘調査報告書 室町殿と近世西立売町の調査』, 霧島市教育委員会編 2007『平家物語の世界を訪ねて 堀と土塁に囲まれた館 神宮社家跡の調査』・2017『平家物語の世界を訪ねて 国指定史跡「大隅町八幡宮境内及び社家跡」』
- (9) 鹿児島市教育委員会編 2015「北麓遺跡」(『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』74)
- (10) 広島県立歴史博物館編 1998『戦国の城下町 越前朝倉氏・一乗谷』, 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編 1998『越前朝倉氏 一乗谷 眠りからさめた戦国の城下町』・2002『戦国大名朝倉氏 その戦いの軌跡をさぐる』・2015『朝倉氏が描いた夢 一乗谷 戦国城下町の栄華』
- (11) 熊本県教育委員会編 2014「花岡木崎遺跡」(『熊本県文化財調査報告書』305), 新 芦北町誌編さん委員会編 2020『図説 芦北の歴史』
- (12) 鹿児島県立埋蔵文化財センター編 2004「下永迫A遺跡」(『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』72), 永山修一 2009「平安時代前期の南九州」(同『隼人と古代日本』第6章)
- (13) 「倭名類聚抄」巻九では「出水」と表記
- (14) 「僧經覺解」(近衛家本知信記天承二(1132)年巻裏文書)(『平安遺文』巻五 2227)及び建久八(1197)年「薩摩國圖田帳寫」(「島津家文書」之一(『大日本史料』))では島津荘一円領として「和泉郡」と表記
- (15) 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター編 2014「中郡遺跡群」(『公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書』1)
- (16) 江平望 1996「薩摩国守護所はどこにあったか」(同『島津忠久とその周辺 中世史料散策』), 吉本明弘 2014「薩摩国守護所プランの変遷についてー南北朝期総州家島津氏を中心にー」(新・清須会議実行委員会編『守護所シンポジウム 2@清須新・清須会議 資料集』)
- (17) 藤岡謙二郎 1979「薩摩国」(同編『古代日本の交通Ⅳ』第8章西海道第8節), 渡部徹也 2004「薩摩国」(古代交通研究会編『日本古代道路事典』第8章西海道), 東和幸 2010「薩摩川内市の古道跡(予察)」(『黎明館調査研究報告』第23集)
- (18) 下鶴弘 2021「中世島津家の居城ー木牟礼城から碓山城, そして清水城へー」(令和3年7月31日開催黎明館ふるさと歴史講座資料)
- (19) 三木靖 2020「鹿児島島の城と鹿児島城ー史料にみる城ー」(前掲1『黎明館企画特別展 鹿児島城の城館』。「建武三(1336)年2月7日土持宣栄軍忠状」(鹿児島県維新史料編さん所編 1979「旧記雑録 前編1」1776号(『鹿児島県史料』))には, 「去年(建武二)十二月廿四日, 祐廣以下凶徒等, 楯籠嶋津庄穆佐院政所之間, 同晦日, 一族相共馳向彼城, 致散〃合戦追落之時, 祐廣親類若黨以下數十人討取之畢」と見える「穆佐院政所」や「南加納政所」, 「浮田庄預所」等の荘園経営拠点の軍事利用が見られる。
- (20) 都城市教育委員会編 2018「郡元西原遺跡(第2次調査)」(『都城市文化財調査報告書』134)
- (かみむら としひろ 学芸課主任学芸専門員兼企画資料係)